ISSN 2189-1826

# 月刊ニューズレター
# 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて

第85号 2022年1月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
（編集世話人 冨岡勝・谷本宗生）
連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 冨岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp
HP（最新号とバックナンバーを公開中）
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/


| | | |
|---|---|---|
| コラム 吉見俊哉「大学の第二の死とは何か コロナ・パンデミックのなかで」（2020年初出）を読んで | 谷本 宗生 | 2 |
| 逸話と世評で綴る女子教育史（85）<br>『人形の家』“新しい女”と公開離縁状事件― | 神辺 靖光 | 5 |
| 教養課程委員長酒井清六の新入学生へ向けての呼びかけ<br>－さあやる気を出そう もはや生徒ではなく学生だ 自主的な学習計画をたてよ（1970年4月）－ | 谷本 宗生 | 10 |
| 子どもたちと考える校則①<br>－連載をはじめるにあたって－ | 八田 友和 | 13 |
| 明治後期に興った女子の専門学校（40）<br>女子美術学校のはじまり | 長本 裕子 | 16 |
| 新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究に関する覚書（10）：鳥取東高等学校『柏葉』にみる専攻科（10） | 吉野 剛弘 | 20 |
| 学生寮史の研究 ②<br>― 近代日本における青年の共同生活― | 金澤冬樹 | 25 |
| 体験的文献紹介(33) ― 進学系統の中の「中学」― | 神辺 靖光 | 31 |
| 刊行要項（2015年6月15日現在） | | 36 |
| 短評・文献紹介 | | 37 |
| 会員消息 | | 38 |

コラム

# 吉見俊哉「大学の第二の死とは何か　コロナ・パンデミックのなかで」（2020年初出）を読んで

谷本（たにもと）　宗生（むねお）（大東文化大学）

## はじめに

吉見俊哉さん（東京大学、社会学）が、2020年8月の雑誌『世界』に初出した「大学の第二の死とは何か　コロナ・パンデミックのなかで」が、『大学は何処へ　未来への設計』（2021年、岩波書店、序章）に所収されていたので、この機会にじっくり拝読してみました。とくに興味深い‥と私（谷本）が感じた項目につき、以下でその内容を紹介してみたいと思います。

## 大学に、バブル崩壊が遅れてやってくる

コロナ・パンデミックの危機以前から、日本の大学では「深刻な危機」を迎えているのだと、著者の吉見は指摘します。1945年で日本の大学は50校もなかったのが、2010年代までに約780校にまで激増しました。大学生数も、45年の約8万人から2011年の約290万人へと約36倍も増えました。大学院生数も、50年には約190人であったのが、2010年には約27万人で約1430倍の増加率を示しました。それにひきかえ、18歳人口はピークとなった1966年の約250万人から、2010年の約120万人にまで半減しています。戦後日本の大学は、「あまりに不釣り合いな量的拡大を続けてきた」といえるでしょう。

2000年代以降、志願者数低下に直面した大学では、選抜方式の多様化や社会人学生枠の拡大、大学広報の強化といった、学生志願者マーケティングを必死に展開し、さらに学生の就職活動支援も教職員らの甚大な労力によって充実させていきました。しかしながら、日本の18歳人口は、2030年には約105万人、40年には約88万人に減少していき、20年後には18歳人口は現在の4分の3となります。学生

の定員割れもいっそう深刻化していくことが懸念され、吉見によれば「大学はますます「経営」の観点から論じられ、大学のビジネス化が強まっていくだろう。だが、その先に明白なビジョンがあるわけではなく、経営の論理に支配される大学は、企業的な視野を超えて新しい大学像を樹立できない」と問題視します。東京大学でも理事・副学長職を務めたほどの吉見のこのような痛烈な指摘は、まさに大学をめぐる構造的な背景をズバリと言い当てていると率直に感じました。

**自らの首を絞め続ける大学の苦悩**

人口構造の変化を無視した、大学数や学生数の増加、学部名称の爆発的な多様化は、1990年代以降の新自由主義的な規制緩和路線で拍車がかかります。高等教育政策が、旧来の許認可主義から補助金行政へとシフトしていく流れのなかで、大学設置基準の大綱化と教養教育の空洞化、大学院重点化と大学院の質の低下、国立大学法人化と大学間、分野間の格差拡大なども生じました。新入学生を多く獲得するために、また研究の補助金を多く獲得するために、多くの大学では、教職員らの本来「研究」や「教育」のために必要であった時間を大幅に削って疲弊してしまう‥という状況があります。

さらに問題なのは、「未来へのビジョンの決定的な欠如である。大学教育をトータルにどう変えていくのかの明確なビジョンを欠いたまま、各大学、各教員が目先の必要から激務をこなし、疲弊してゆく」ことだと、著者の吉見は糾弾しています。たしかに、さまざまな「改革」には相応の意義があるわけですが、それぞれが弥縫策でけっして終わらないよう、大局的に大学全体としての方向性を見定めて、少なからずそれにともなう実態を冷静に顧みる機会や検証の猶予がやはりきちんと設けられるべきだと、私（谷本）も大学人の1人として強く感じます。

**大学は企業のように「経営」されるべきなのか？**

２０００年代以降、大学をめぐっては、公的な国家の後退と財界のせり出しという政策シフトが顕著にみられ始めました。ところが、不思議なことですが、私（谷本）も含め多くの大学関係者らもきっと同じような認識なのかもしれませんが、経済界がいちばんもとめる大学教育への期待や要望は、総じてリベラルアーツ的な教養や現代社会に応じるコミュニケーション的な素養‥といった、大学が本来目指すべき教育課題や教育内容であるという事実です。この点につき著者の吉見の言では、「企業経営的な手法が盛んに取り入れられ、大学は何よりも「経営」されるものでなければならないと、多くの大学人が思い込んだ。つまり、目的と手段の取り違えが広範に起きたのである」とし、「本末転倒以外の何物でもない。そうして大学が効率化や生産性、卓越性だけを追求した先で残るのは、精神の荒廃でしかないだろう」と強調しています。旧来の企業経営的な視野や発想などとは異なる、２１世紀的に相応しい大学独自な教育・研究を発展展開させるような能力資質こそが、実は経済界も強く望む核心であったのだ‥という、まさに哀しい大学判断のギャップが生じているのでしょう。

そして、いちばんの「ポイントは、危機の先で向かうべき大学の姿、未来の大学へのビジョンが、大学教職員と学生、社会によって共有されるか否かである」といいます。大学関係者自身の意識や認識の共有という点では、日常の大学運営のなかで、きちんと話し合いが民主的に慣行として行われているか、また施策の決定事項につき丁寧な説明や周知のための機会が十分に設けられているか、といったきわめて組織体としてシンプルで当たり前のことが普段からできているかではないかと、私（谷本）も考えています。

**＊このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしています。**

# 逸話と世評で綴る女子教育史（85）

## ―『人形の家』“新しい女”と公開離縁状事件―

神辺（かんべ） 靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

明治44年11月、帝国劇場でイブセンの『人形の家』が上演された。主役ノラを演ずる松井須磨子の名演技によって、封建的な家庭の主婦が人間としての活動を認められないで、人形のように愛玩されているだけではないかという叫びが劇場内に響きわたり、大きな社会的影響を与えた。初公演は明治の末年であったが、『人形の家』は大正昭和初期まで何回となく上演され、そのたびに若い男女に感銘を与えた。第二次大戦中の数年間は逼塞（ひっそく）させられたが敗戦のその年の暮、東京の有楽座での新劇初公演では『人形の家』がとり上げられた。長い行列の末、やっと買い求めた入場券を握りしめた観客の中に、かく言う筆者（神辺）もいたのである。劇場内の興奮は忘れられない。

「青鞜」創刊号の表紙

同じ明治44年9月、平塚らいてう（本名、明（はる））を盟主とする『青鞜（せいとう）』第1号が発刊された。「原始、女性は実に太陽であった。今女性は月である。他によって生き、他の光によって輝く病人のように蒼白い顔の月である」の名文句ではじまる“新しい女”の開幕である。「人形の家」が明治44年にはじまっても大正昭和初年に勢威を張ったように、“新しい女性”もまた大正昭和初年まで物議をかもしながら断続するのである。

晩年の平塚らいてう

らいてうの巻頭言にみる如く『青鞜』は文学好きの女性たちのサロンのようなものであった。しかし『青

鞜』ははイギリスの婦人運動Blue-Stockingからとったもので女性解放運動の側面も持っていた。そこで大正2年1月の『中央公論』にらいてうは「新しい女」論をのせ、「自分は新しい女である。日々新しい女でありたいと願い、日々努めている」と書くと忽ち“新しい女”とはなにかという議論がまき起ったのである。『中央公論』や雑誌『太陽』は特輯号を出して大方、好意的な論陣を張った。これに対し、大衆的な新聞はひやかし半分の枝葉の小事をあげつらった。例えば、女性解放運動の一つとして遊郭を視察すれば、吉原登楼の記事になったり、西欧の女性用の酒・ペッパミントを飲むと「五色の酒」を飲んだと騒がれた。こうした世俗的世論攻撃に天才的才女たちのサロン的集りは抗し切れず大正5年、青鞜社は解散した。

それからしばらくたった大正8年末、政治活動をする新婦人協会が興る。この間に漁村の主婦たちが火をつけた米騒動が勃発するが、それは稿を改めるとして、インテリ女性の政治改革運動を一瞥(いちべつ)しておこう。

大正8年末、青鞜社の平塚らいてうや市川房枝、奥むめおらが新婦人協会をつくり、女性の政治結社加入と政治演舌会の主催および参加の禁止に対する廃止運動をはじめた。大正11年の議会は女性の政党加入は相変わらず禁止したが、政治演舌会の主催と参加だけは自由にした。しかるにこの運動が一部とは言え成功したとたんに新婦人協会は解散した。これは女性だけのことではない。インテリの活動家が共通して落ち入る弱点である。新しい思想をかざして理想を叫ぶ時、その思想の純粋性を尊重する余り他流をいたずらに落しめる。闘わねばならない旧体制の標的から次第にそれて友軍たる自分たちの亜流を敵視してしまう。現代日本の政党政治に於て野党が常に分裂して保守党に歯が立たないのをみればわかるだろう。さて本論に戻れば、新婦人協会が当面の課題に多少成功したにもかかわらず解散したが、これをきっかけにいろいろな婦人団体がうまれだした。大正10年には矯風会内に日本婦人参政権協会、11年にはもとの新婦人協会の一部が婦人連盟となり、また大阪朝日新聞の援助で婦人関西連合会ができて社会政治運動に進出した。東京ではさらに婦人市政研究会、革新

クラブ婦人部などが次々につくられ、12年に婦人参政同盟に連合した。婦人参政同盟は政界に婦人参政権を建議したが、当時の政界は婦人参政権を全くとり上げなかった。しかし大正時代に芽吹いた女性の参政権は暗い昭和の戦争期間も脈々と生き続け、戦後の開放期に一気に踊り出て女性代議士を生み出したことを想えば、大正期の婦人参政権運動は社会史的意義があったと思う。

月によって病人のように蒼白く光る女ではなく、自ら光り輝く新しい女性であるならば、人間の根元的情念である異性への愛も女性が主体であらねばならない。らいてうはすでに妻子ある男性と心中未遂事件をおこしていた。相手は夏目漱石門下の若き作家・森田草平で日本女子大卒業後、文学サークルで知り合ったのである。二人は愛し合ったが妻子ある男では恋愛は成就できないと思って心中をはかったが、失敗に終わったのである。しかし「原始、女性は太陽であった」と女性の主体性を説くらいてうは一度の失敗でひるまない。大正4年、年下の画家・奥村博史（ひろし）と同棲した。世間の非難は高かったがらいてうはこれを結婚と呼ばず“男女の共同生活”として二人の子どもを生み育て、女性の主体性を顕示したのである。

竹村民郎著『大正文化』（講談社現代新書）の付録『大正文化史年表』はすべて新聞記事からとったという稀有（けう）な年表である。大正5年10月の頃に「離婚で日本世界一、5万8千件」という衝撃的な記事がある。まさからいてうの影響でもあるまいが、このような傾向の上にらいてうの“新しい女性”の生き方が顕示されて大騒ぎになったという事が考えられる。

大正10年には美貌の歌人・柳原白蓮の「公開離縁状事件」が起こった。“九州の炭鉱王”と言われる富豪の伊藤伝右衛門の妻燁子（あきこ）（歌人筆名柳原白蓮（やなぎはらびゃくれん））が離縁したことであるが、燁子が、この離縁を大正10年10月22日の「大阪朝日新聞」に投稿したためセンセイショナルな事件になったのである。

燁子は伯爵柳原前光と東京柳橋の美人芸者の間に生まれた妾腹の子であった。父のもとに引き取られたが、正妻にうとんぜられて、北小路子爵家に里子に出された。そしてはじめからの予定どうり北小路家の頭の悪い嫡子・資武と結婚、燁子15歳で子どもを生んだ。しかし愚かな夫となじめず“妾の子”という罵声にいたたまれず、ついに婚家を飛び出してしまった。彼女は歌の才能があったので柳原白蓮の筆名で歌をよんでいた。一方、柳原家では世間体を気にして再婚相手を探し、九州屈指の富豪・伊藤伝右衛門との再婚をすすめた。伊藤は一介の炭鉱夫からたたき上げた立志伝中の炭鉱経営者で石炭王と騒がれた人物である。財産はあるが出自が貧しいため、華族の嫁を貰ってハクをつけたい所であった。こうして両家のおもわくが一致し、明治44年3月、50歳の伊藤伝右衛門と当時25歳の柳原燁子（白蓮）の結婚が整ったのである。伝右衛門は彼女のために建築費だけでも80万円（現在なら何億円になるだろう）をかけて別邸をつくってやるし、彼女の処女歌集には高名な挿絵画家ともども600円をかけて処女出版してやった。伝右衛門にすれば莫大な金をかけてやることがすべての愛情の表現であると思ったらしいが、燁子にとってお金をかけることは愛でもなんでもなかった。燁子にとって文学・芸術に対する伝右衛門の無知蒙昧は怖気がふるえるほどいやなことであった。彼女は夫の性慾を忌み嫌い、夫に妾をすすめ、自分は専ら建てて貰った別邸に拠って集る文人墨客（インテリ文化人）との知的交際を楽しみ、いつしか“筑紫の女王”と呼ばれ、このサロンを

明治44年
伊藤伝右衛門と
結婚式

大正のある日
伊藤伝右衛門妻燁
子（柳原白蓮）

牛耳(ぎゅうじ)った。こうした燁子の前に大正9年、東京帝大出身の宮崎竜介が現れた。中国の革命家・孫文のうしろ立てになった宮崎滔天(とうてん)の長男である。彼は進歩的組織・新人会の有力メンバーでもあった。二人は忽ち恋仲となった。そして燁子が彼の子を宿した大正10年10月、大阪の大新聞に伊藤との離縁状を公開し一大センセイションを巻き起したのである。

「私は今あなたの妻として最後のお手紙を差し上げます」ではじまる10月22日「大阪朝日新聞」夕刊掲載の離縁状は「結婚当初から私とあなたとの間には全く愛と理解を欠いていました」と言い「私の自由と尊貴を守り培(つちか)うためにあなたの許を離れます」と政略結婚の悪と女性の自由の尊厳を明確に述べている。大阪朝日新聞には500通余の読者の反応が寄せられたが、その7割が燁子を支持するもの、燁子を糾弾するもの2割、その他1割だったという。当時、既婚女性が配偶者以外と性的関係を持つことは犯罪であった。にもかかわらず燁子を支持する輿論(よろん)が多かったのは男性が妾を持つことは不問にされていたからであろう。新聞に離縁状を公開され世間から嘲笑された伊藤伝右衛門は沈黙を守った。姦通罪で告訴することもできたが、それもしないで離婚を受け入れた。彼の剛毅をたたえる向きもある。燁子は二児をもうけ、昭和42年、波乱と幸せな生涯を閉じた。

昭和初年のある日
燁子、一男一女と
夫宮崎竜介

参考文献

講談社『目録20世紀1921年大正10年』
世界文化社『大正クロニクル』
井上清『新版日本女性史』

## 教養課程委員長酒井清六の新入学生へ向けての呼びかけ
## ― さあやる気を出そう もはや生徒ではなく学生だ 自主的な学習計画をたてよ（1970年4月）―

谷本（たにもと） 宗生（むねお）（大東文化大学）

大東文化大学では、東松山校舎（埼玉県東松山市）の開設にともない、1967（昭和42）年開設の教養部は、1970年には教養課程委員会と改称され、同委員長のもとに一般教育科目・外国語科目・保健体育科目の3科目主任も置かれ、教養課程の専任教員らによって円滑な運営が目指されたのである。当時の中央教育審議会などでも提起されていたように、戦後新制大学の一般教育と専門教育のつながりを重視して、本学でも教養課程委員会による教養教育の充実を実践的にはかったといえよう。

以下は、初代教養課程委員長を務めた酒井清六（生1925～没2004年）が新入学生へ向け、「さあやる気を出そう もはや生徒ではなく学生だ 自主的な学習計画をたてよ」（1970年4月）とあつく呼びかけたものである。

＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊

**入学おめでとう**

…もはや諸君は「生徒」ではない「大学生」である。大学の学生はどのように勉強するかをよく考えなければならない。大学では、親の過保護も教授の強制もない。諸君、みづからが自分で「自主的に勉学」の計画を樹て、諸君の学びたいと思う科目を選択履修しなければならない。教養課程では必須科目と選択科目があり、講義の方法もクラス別に固定した時間に勉強するクラス別固定科目（主として外国語、専門科目）と、その他の空いた曜日や時限に自分で選択できる自由選択科目（一般教育科目の人文、社会、自然科学系列、体育科目、教職科目）

とがある。だから、自由選択については学生諸君一人一人が自分で好きな曜日、時限に履修計画をたてる必要がある。

教養課程の科目は、四年間に履修することが望ましいが、本学では設備、カリキュラムの関係から二年間でこれをとることになっている。…不合格になると二年次の終りに東松山から板橋の専門課程にすすむことができなくなる。いわゆる留年生になるからよく単位がとれるよう、自分で計画を樹てて留年しないようにすべきである。

本学は建学の精神に則り、共産主義でもない中道中立の精神をもって、政治的イデオロギーに汚染されることもなく勉学することができるような教育計画がたてられている。大学は研究、教育、人間形成が目的ということができる。…できるだけ国家社会に知的貢献をする学者、研究者を大学にようし、国際的な文化交流の中心になることを目的としている。このように、大学は研究開発によって知識の獲得に努め、その成果を教育するとともに、その学術を社会に応用できるように努めることも大学の使命の一面である。そのため、大学が国家権力や政治目的の色彩からも自由でなければならない。

これからの大学は社会に貢献するとともに、近代化の担い手であることも必要であり、創造的な研究開発を行ない、社会に対して、その成果を積極的に指導する必要がある。また社会からの問題についても、創造的な研究によって問題を解決する能力を示し、その成果を学生の教育におり込む使命もある。

**大学は学問の場所**

…学問とは何か。これはまことにむづかしい質問である。ただいえることは、学問の生命がオリジナリティーであり、新しいものを創り出そうという姿勢が根本的なものと思う。…日進月歩の学問に対処するためには、教授も学生もともに学ぶ態度が必要となり、学問の問題は教授と学生で討論、研究によって解決しなければならない。…学問するという立場では、学生とともにこそすれ、先生が学生よ

り一段高いところにいるとは思わない。この点では全く平等でこそあれ、この相互こそ学問に創造性が生れる原動力となる。

…今まで申し上げたように今日の学問はますます細分化しているため、哲学としての統合的な見方がうすれ勝ちである。あるときは専門的に、あるときは広い視野にたって学問相互の関係を知ることも大切である。また文科系の学問は理科系の手法を、また逆も必要で異質の学問の研究態度は、その学問の進歩に効果的な影響をあたえる。このように専門化と総合化、異質の学問の思考法を体得するため、まず諸君が学問分科相互間のつながりを、広い眼で視られるように、教養課程の教育の重要性が生れてくるのである。

…学問分科間の相互関係を教養課程で総合的に学べば、同じ学説の講義も諸君の批判を生み、さらにオリジナリティーにつながる光彩のある応用化に富んだ活きた学問になると思う。大学教養課程の教育の主眼は、ここに一つの目的がある。したがって教養課程では、ちょうど専門の学問のくさびをうち込むように、だんだんと異質の学問や基礎的な語学とともに専門の学問をふやし諸君の血となり肉となるように配慮している。…高校で得られなかったその学問の面白味を、意外にもきっと味わうことができると思う。

＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊

教養課程委員長の酒井によれば、本学に入学してきた新入学生は、もはや生徒ではないという。親の過保護や教師による強制から放れて、自主的に自分自身で留年しないように、学習計画をたてることから第一歩が始まる‥と強調している。学問の府である大学では、新たなオリジナリティーを創り出そうという意欲などに学生諸君も触発され、幅広い教養課程の教育に積極的に取り組んでもらえれば、狭いや硬直したといった印象ではなく、自身の血肉となるような「活きた学問」と実感するであろうとする。それが、規定された高校までの教育などとは違う、まさに学問の醍醐味、面白さにほかならないと予言している。この新入学生へ向けた呼びかけ文の全体からも、酒井をはじめとする本学教員らの並々ならぬ、あつい思い（学生への期待と激励）を十分うかがえるであろう。

# 子どもたちと考える校則①

## ー連載をはじめるにあたってー

八田（はった） 友和（ともかず）（クラーク記念国際高等学校）

### 1. はじめに：新連載をはじめるにあたって

2022年1月のニューズレターより「子どもたちと考える校則」をテーマに新しい連載をはじめる。これまで27回にわたって「学校資料の教材化を模索する」というテーマで連載した。この連載では、学校資料（学校に関わるあらゆるモノやコト）[1)]を取り上げて、①学校資料の教材化、②学校資料を組み込んだ授業モデルの開発、③学校資料を組み込んだ授業実践紹介、などを行ってきた。具体的には、校歌・教科書・集合写真などを取り上げ、様々な学校資料の活用方法について模索してきた。一方で、個々の学校資料を組み込んだ授業実践等についてはある程度模索できたものの、学校資料を組み込んだ長期的な活用（例えば、単元計画の開発など）については検討することができなかった。その反省も踏まえて新連載では、「校則」をテーマにした長期的な授業実践を行い、本連載で紹介していきたいと考えている。

### 2.「校則」をテーマにした背景

2021（令和3）年6月、文部科学省が「校則の見直し等に関する取組事例」という事務連絡を発出した。『生徒指導提要』においても、「児童生徒の実情・保護者の考え方・地域の実情・社会の常識・時代の進展などを踏まえて校則を見直すこと」[2)]という一文があり、絶えず積極的に校則を見直すことの重要性が読み取れる。

そもそも校則は、学校が教育目標を達成するために必要かつ合理的な範囲内で定められる規則を指す。しかし、その合理的な範囲を逸脱する校則が世の中に多く存在していることも確かである。よって、現在使用されている校則を無批

判・無自覚に受け入れるのではなく、校則を知り・批判的に検討することが必要だと考えた。校則を批判的に検討する際、児童生徒が主体的に考える機会を創出することや、保護者の意見を取り入れる場を設けることで、「校則の見直し」を「学校づくり」に繋げることができると考え、今回連載テーマとした。加えて、生徒や教職員が対話を重ねるなかで、「対立」を経て「合意形成」に至るプロセスは、社会が求める課題解決能力や探究的な学びにも繋がっていくのではないかとも考えている。

## 3. さいごに

新連載「子どもたちと考える校則」は、そのテーマ通り、筆者だけでなく子どもたちと一緒に「校則」やその在り方について考えていく予定である。その過程で、子ども達が過ごす学校は「他者から与えられたもの」ではなく「自分たちで作っていくもの」という認識を共有していきたい。

今後、この連載では末尾にQRコードを添付します。拙稿に対するご意見・ご感想などございましたら、ぜひQRコードからお寄せいただけますと幸いです。今後の研究や執筆活動の参考にさせていただきます。なお、本稿における内容や意見は、筆者個人に属し、筆者が所属するいかなる組織・団体の公式見解を示すものではありません。

**ご意見・ご感想などは、上記のQRコードからお寄せください。**

**【注釈】**

1）定義等については、『みんなで活かせる！学校資料－学校資料活用ハンドブック』p.6を参照。
2）『生徒指導提要』p.193より引用。

**【参考文献】**

・大津尚志2021『校則を考える－歴史・現状・国際比較－』晃洋書房
・河崎仁志ほか2021『校則改革－理不尽な生徒指導に苦しむ教師たちの挑戦』東洋館出版社
・村野正景・和崎光太郎（編）『みんなで活かせる！学校資料－学校資料活用ハンドブック』京都市学校歴史博物館
・文部科学省2010『生徒指導提要』教育図書
・文部科学省HP「校則の見直し等に関する取組事例」
（最終確認2022年1月1日）
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1414737_00004.htm

# 明治後期に興った女子の専門学校（40）

## 女子美術学校のはじまり

長本（ながもと） 裕子（ゆうこ）(ニューズレター同人)

私立女子美術学校（現女子美術大学の前身）は、明治34年4月、本郷区弓町（現東京都文京区）において開校した。前年の33年10月19日、藤田文蔵、横井玉子、田中晋、谷口鐵太郎4名の連名で、東京府知事あて設立願を提出し、同年10月30日に認可された。32年8月公布の「私立学校令」に準拠し、学制上は各種学校に分類される。

「女子ノ美術的技能ヲ発揮セシメ専門ノ技術家及教員タルベキ者を養成スル」ことを目的とし、普通科3ケ年、高等科2ケ年、選科1ケ年、研究科2ケ年の課程を合わせ持つ美術の専門教育機関として出発した。入学資格は、普通科「小学校高等科卒業者若シクハ之ト同等以上ノ学力ヲ有シ年14才以上ノモノ」、高等科「本校普通科卒業者若シクハ高等女学校卒業以上ノモノニシテ志望修技ノ普通科以上ノモノ」とした。

教育内容を見てみよう。普通科の場合、正科として日本画科・西洋画科・彫塑科・蒔絵科・編物科・造花科・刺繍科のうち一つの科を志望する。そして、それぞれに専門科目が配される。副科として修身科・読書科・作文科・習字科・算術科・家政科・裁縫科等が教授される。高等科の場合、正科として日本画科・西洋画科・彫塑科・図姦（ずあん）科があり、副科として倫理科・教育科・国語科・数学科・外国語科・美術史科・美術解剖科が教授される。

このように入学資格及び教育内容から、普通科は高等女学校に、高等科・研究科は専門学校とほぼ同等のレベルをもつものであった。

女子美術学校設立趣旨の前半に、美術の発達がその国民の文明知識信仰趣味の程度を表すものであること、我が国においては、美術教育が男子に限られており、女子の教育はほとんど顧みられていないことが述べられている。さらに、趣旨の後半で、

夫れ女子には自ら美術的の性情を備ふるものあり（略）女子には女子特得の技能を有するは蓋し否む可らず（略）

女子に向て美術教育を施し彼等をして其学習せし所を以て彼等の工芸手工其他日常の業務上入学資格適応せしめ因て以て彼等が自活の道を講じ得るに資し従て彼等の社会に於ける位置を漸次高進せしめ次には女子師範学校其の他各種の女学校に於ける美術教師を養成して今日の不足に応ぜしめんとするにあり（略）

と謳った。女子が備えている美術的特性を美術的教育によって発揮させ、完成させることが急務である。また、女子の社会的地位の向上、自活の道として女子師範学校その他各種の女学校の美術教師を養成することを目指したのである。

明治30年代、近代日本の女子高等教育機関が本格的に発足する。33年7月女子英学塾（現津田塾大学の前身）、同年12月東京女医学校（現東京女子医科大学の前身）、34年4月日本女子大学校（現日本女子大学の前身）が相次いで創設された。しかし、美術の専門教育機関は女子に対して門戸が開かれていなかった。東京にあった唯一官立の美術専門教育機関東京美術学校（明治22年2月開校、現東京芸術大学美術学部の前身）は男子のみを募集した。私立女子美術学校は、近代的職業への女性の進出の気運が高まりつつあった時代、美術を専門に学び、技術家及び教員を養成する我が国唯一の女子の学校としてスタートした。

開設の中心となった横井玉子について述べよう。玉子は、嘉永7（1854）年9月、熊本新田藩家老原尹（まさ）胤（たね）の次女として、江戸藩邸内で誕生。明治元年、14歳の時藩主とともに家臣一同熊本高瀬（現熊本県玉名市）に移る。3年、熊本洋学校で、アメリカから招聘されたL.L.ジェーンズの英語の授業を、廊下で聴講する。女子とともに学ぶことを拒否する男子が多かったからである。しかし、ジェーンズ夫人から西洋料

横井玉子（『女子美術大学八十年史』）

理や洋裁を教わり、新しいアメリカ文化と出会う。5年、玉子18歳で横井左平太と結婚した。

左平太は、幕末の思想家・開国論者横井小楠（しょうなん）の甥で、小楠の養嗣子となった。小楠は、慶應2（1866）年4月、左平太を弟とともにひそかに渡米させた。だが、明治2年1月、小楠は尊王攘夷派の刺客に暗殺されてしまう。左平太は航海術、政治、法律を学び渡米6年後に帰国し、原玉子と結婚した。間もなく新政府から渡米を命じられ、2年後の8年6月帰国し、元老院権少書記官となったが、肺を病んでいた。夫の看護のため玉子は上京するが、左平太は同年10月、31歳で死去した。わずか3年間の結婚生活、しかもそのうちの2年間左平太は米国にいた。実質1年ほどの結婚生活であった。

21歳で未亡人となった玉子は、義母つせ（小楠の妻）に仕えながら、裁縫、料理、茶道、作法などあらゆる女性の技芸を修めた。玉子は12年、芝教会でワデル牧師により受洗する。14年、小笠原家の高等女礼式を卒業。義母つせの妹矢島楫子（かじこ）の紹介で、18年、築地の新栄女学校に奉職し、事務監督及び礼式、裁縫の教鞭をとった。矢島は、10年、米国長老教会経営の新栄女学校の舎監兼教諭を務め、13年から同じ長老会の桜井女学校の校長を務めていた。玉子は19年、東京師範学校女子師範科で高等裁縫と高等女礼式の教授資格を取った。そして、22年、新栄女学校と桜井女学校が合併して女子学院（院長矢島楫子）となり、玉子は礼式、裁縫、洋画、割烹の授業を担当し、寄宿舎の舎監をも兼任する。

玉子は美術に対する趣味が深く、本多錦吉郎、浅井忠など当時第一線で活躍中の西洋画家について油絵、水彩、デッサンを学んだ。32年、黒田清輝ら西洋画家の団体「白馬会」に入会し、洋画を研究する。

女子学院の卒業生は玉子について、“背のすらりと高い色白の美しく上品な方でした。”“諸芸に通じておられましたが、ごく淡白な少しも厭味のない親切な先生”だったと語る。（『女子学院五十年史』）後に、玉子が女子学院を辞めた時、代わりの教師は三人必要になったという。

19年、矢島楫子が東京婦人矯風会を設立すると、玉子は会員として叔母を助け、婦人の議会傍聴禁止に対する反対（23年）、男子に対する姦通罪制定の請願（26年）をはじめ、婦人の地位向上と社会改良のための運動に加わるようになる。

ところが、33年9月、新栄女学校から通算16年間勤めた女子学院を辞し、女子美術学校設立に乗り出す。その理由はあまりよくわからない。以前アメリカから帰国した夫佐平太から、アメリカのフィラデルフィアには女子だけが学ぶムーア美術学校があると聞いたことがあった。それが脳裏にあったのかもしれなかった。義父横井小楠、叔母矢島楫子など、周囲に教育家が多かったことや、東京婦人矯風会の活動などが影響したと考えられる。玉子自身若くして未亡人となり、自活しなければならなかった。義母から教わった技芸の数々、それをもって叔母矢島楫子が引き上げてくれたから教員として立つことができた。そういう自身の経験から、いざというときの自立独立の手立てとして、女性の専門の技術家や教員を養成する学校設立を思い立ったのではなかっただろうか。

女子が学べる美術の学校を創りたいという思いが募った玉子は、かつて絵を教わり、東京美術学校教授となっていた浅井忠に協力を求めた。しかし、浅井はフランスに留学してもう一度絵を学び直そうと考えていた。そして、東京美術学校教授藤田文蔵を推薦した。やがて藤田の協力を得て、女子美術学校のスタートとなった。

参考文献

『女子美術大学八十年史』

山崎光夫『二つの星』横井玉子と佐藤志津　女子美術大学建学への道

# 新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究に関する覚書（10）：鳥取東高等学校『柏葉』にみる専攻科（10）

吉野（よしの） 剛弘（たけひろ）（埼玉学園大学）

今号では、引き続き鳥取東高等学校より刊行されている『柏葉』に掲載された専攻科の教育課程に関する情報を検討する。今号では第83号より検討に入った鳥取東高等学校専攻科に導入された大手予備校の衛星講座について、その受講動向を対象とする。

前号で検討したように、『柏葉』に掲載された講座内容に関する情報は、不正確な点も見られた。一方、今号で取り上げる受講生徒数は、鳥取東高等学校側が持っている情報であるから、そう大きな食い違いはないだろうと思われる。

衛星講座は、現役生が履修しているケースがある。1997（平成9）年度は人数も記載があり、1998（平成10）年度のセットで開講というものも、現役生と専攻科生が一緒に受講しているというものであろう。1998（平成10）年の冬期以降については特に記載はないが、同様のケースはあったものと推察される。

1年半という限定的なデータではあるが、現役生が上級者向けの授業を履修していることが極めて少ない。例外なのは、1997（平成9）年度の東大文系数学と理系数学くらいである。現役生の受講が多いのは、センター試験対策のものと、基礎レベルのものである。裏を返せば、上級者向けの授業は専攻科生向けということになる。ただし、専攻科生の上級者向けの授業の履修者数が取り立てて多いというわけでもない。

1997（平成9）年度のみ受講者の内訳が示されている。本題からは少しずれるが、この情報からは、A組が文系、B組が理系の志望者を集めたクラスであることもうかがえる。「東大文系数学」と「理系数学」、理科の講座の履修者の分布を見るとすぐに理解できる。実のところ、正規の教育課程の科目の履修者数から

も2つのクラスの違いはうかがえるのだが、『柏葉』上ではクラスと文理別の関係は明示されていない。

そのようなことをふまえて内訳を見てみると、センター試験対策の科目の受講者は、A組が明らかに多い。理科の受講者数も少なくないことから、文系志望者は難易度が比較的高い国公立大学の志望者が多いことが見込まれる。理系志望者は、授業料の違いもあってもともと国公立大学志向は強いだろうが、社会の受講者が文系の理科ほどに多くはないことから、文系ほどの上位校志向はないようである。

細かなところを離れて全体を概観すると、センター試験対策のものが講座数として多いことは前号でも触れたが、受講者数も多い。現役生はセンター試験対策や基礎レベルの講座を取りがちであることに触れたが、専攻科生についてもその傾向に変わりはない。

代ゼミと河合塾のそれぞれの講座の受講者数を見ると、河合塾のものが各期の受講者数の多い講座を占めている。例外は、1999（平成11）年度の夏期のみである。また、代々木ゼミナールと異なり、河合塾は衛星講座専用のものを設置しているが、英語、日本史、世界史はその中でも安定的に選択されている。

4年間の推移だけではあるが、各期の合計人数からは、全体的に下火になっていく傾向が見て取れる。ただし、合計人数は延べ人数であるから、1講座以上受講した生徒数が減ったのか、1人あたりの受講講座数が減ったのかは不明である。

とはいえ、検討の対象となっているこの時期は、専攻科の生徒数が減り始める時期でもある。1997（平成9）年から2000（平成12）年にかけては、生徒数が104名、101名、87名、79名と減っていく。その意味では、生徒数が8割に減っている中で、下火になるのは必然ともいえる。

第83号で衛星講座の受講が、2001（平成13）年度以降も続いたかどうかは不明と述べたが、このような趨勢を見ると、本当に受講を止めたのかもしれな

い。一方、減りゆく生徒数への起死回生策としての衛星講座だとすると、しばらくは続けた可能性も残る。

さらには、この時期からは、株式会社ナガセが運営する東進ハイスクールが、個別視聴が可能な東進衛星予備校を地方にも進出させ始める。その点を勘案しても、学校に集まってみんなで衛星講座を見るということがなくなっていったとも考えられるのである。

衛星講座が持った意義について考えるには、専攻科の生徒たちの志望状況を見る必要があるだろう。最も好適な資料は年度途中に実施していると思われる志望校調査なのだが、現段階でそれは分からない。『柏葉』で分かるのは生徒たちの進学状況だが、これは一つの傍証にはなるだろう。次号からはこの点を検討していく。

（付記）本研究は科学研究費補助金（20K02435）の助成を受けたものである。

| 年・期 | 予備校 | 講座名 | レベル | 人数 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | A | B | 現役 | 計 |
| 1997 | 代ゼミ | ***センター試験英語（(英文読解)？／(英文法・語法)？）*** | | 42 | 16 | 2 | 60 |
| (平成9) | | センター試験物理ＩＢ | | | 28 | | 28 |
| 夏期 | | センター試験化学ＩＢ | | 16 | 18 | 2 | 36 |
| | | センター試験生物ＩＢ | | 33 | 3 | | 36 |
| | | センター試験日本史B | | 17 | 3 | | 20 |
| | | センター試験世界史B | | 17 | 13 | 2 | 32 |
| | | センター試験地理B | | 19 | 12 | | 31 |
| | | *○ハイレベル英語長文読解* | | 19 | 7 | 9 | 35 |
| | | 東大文系数学 | | 4 | | 5 | 9 |
| | | ○理系数学 | | | 25 | | 25 |
| | | ○理系数学 | | | 19 | 5 | 24 |
| | 計 | | | 167 | 144 | 25 | 336 |
| 1997 | 河合 | *(センター試験対策英語)* | | 51 | 28 | | 79 |
| (平成9) | | *(センター試験対策数学)* | | 45 | 29 | | 74 |
| 冬期 | | *(センター試験対策国語)* | | 50 | 23 | | 73 |
| | 代ゼミ | 基礎完成物理（力学・熱・波動） | | | 20 | 5 | 25 |
| | | センター試験化学ＩＢ | | 17 | 9 | 5 | 31 |
| | | センター試験生物ＩＢ | | 28 | 2 | 20 | 50 |
| | | センター試験私大マーク日本史B | | 11 | 4 | 10 | 25 |
| | | センター試験私大マーク世界史B | | 15 | 9 | 12 | 36 |
| | | センター試験私大マーク地理B | | 18 | 6 | 9 | 33 |
| | | センター試験政経 | | 5 | 2 | 1 | 8 |
| | 計 | | | 240 | 132 | 62 | 434 |
| 1998 | 河合 | 最頻出英文法・構文・イディオム総整理 | 応用～ハイレベル | | | | 41 |
| (平成10) | | *(センター数学ＩＡ・ⅡＢ)* | | | | | 31 |
| 夏期 | | 二次・私大数学Ⅰ・A・Ⅱ・B | 応用～ハイレベル | | | | 34 |
| | | *物理(波動・電気)* | 基礎力完成 | | | | 22 |
| | | *(センター試験生物ＩＢ)* | | | | | 30 |
| | | ***近現代世界史(テーマ頻出近現代世界史？／テーマ世界史集中講義(近現代)？)*** | | | | | 20 |
| | | ***近代日本史(テーマ頻出近現代日本史？／テーマ日本史集中講義(近現代)？)*** | | | | | 18 |
| | 代ゼミ | *(ベイシック英語)* | | | | * | 17 |
| | | センター英語 | | | | * | 32 |
| | | *○英語上級レベル養成講座A組* | ハイレベル | | | | 17 |
| | | *○〈超〉重要テクニック数学ＩＡ・ⅡＢ* | 基礎～標準・応用 | | | * | 29 |
| | | *○基礎→応用POWER UP古文* | 基礎～標準・応用 | | | * | 31 |
| | | *○夏で固める基礎化学(有機)* | 基礎～標準・応用 | | | * | 7 |
| | | センター化学ＩＢ | | | | | 11 |
| | | センター地理 | | | | | 21 |
| | 計 | | | | | | 361 |
| 1998 | 河合 | 英語総合読解(難関入試) | 総合攻略～ハイレベル | | | | 19 |
| (平成10) | | 頻出テーマ現代世界史 | 頻出分野攻略 | | | | 16 |
| 冬期 | | ***頻出テーマ日本史(頻出目で見る日本文化史？)*** | | | | | 9 |
| | | ***(センター対策地理B(テスト？／総整理？))*** | | | | | 20 |
| | | ***(センター対策化学ＩＢ(テスト？))*** | | | | | 18 |
| | | ***(センター対策生物ＩＢ(テスト？／総整理？))*** | | | | | 31 |
| | 代ゼミ | センター試験物理ＩＢ | | | | | 17 |
| | | センター試験政治・経済 | | | | | 8 |
| | 河合 | *(センター英語)* | | | | | 40 |
| | | *(センター数学)* | | | | | 36 |
| | | 入試頻出物理 | | | | | 13 |
| | | 入試頻出化学 | | | | | 4 |
| | 計 | | | | | | 231 |

| 年・期 | 予備校 | 講座名 | レベル | 人数 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | A | B | 現役 | 計 |
| 1999 | 河合 | 最頻出英文法・構文・イディオム総整理 | 応用～ハイレベル | | | | 67 |
| (平成11) | | 基礎力完成物理(波動・電気) | 基礎力完成 | | | | 63 |
| 夏期 | | 基礎力完成無機化学 | 基礎力完成 | | | | 51 |
| | | *(センター試験対策生物ＩＢ)* | | | | | 47 |
| | | *頻出目で見る日本文化史* | 応用 | | | | 25 |
| | | *頻出目で見る世界文化史* | 応用 | | | | 21 |
| | 代ゼミ | ***センター数学(ＩＡ?／ＩＡⅡＢ?)*** | | | | | 32 |
| | | *○基礎～数学ⅢＣ『攻略法』* | 基礎～標準・応用 | | | | 20 |
| | | センター現代文 | | | | | 23 |
| | | 東大地理 | | | | | 4 |
| | 計 | | | | | | 353 |
| 1999 | 河合 | *(センター対策数学ＩＡ・ⅡＢ)* | | | | | 29 |
| (平成11) | | ***頻出テーマ近現代日本史(世界史か)*** | | | | | 17 |
| 冬期 | | *(センター試験対策地理B)* | | | | | 19 |
| | 代ゼミ | センター試験・私大マーク世界史 | | | | | 26 |
| | | センター試験物理ＩＢ | | | | | 29 |
| | | センター試験生物ＩＢ | | | | | 27 |
| | 計 | | | | | | 147 |
| 2000 | 河合 | 入試頻出英語総整理 | 標準・応用～ハイレベル | | | | 35 |
| (平成12) | | *(センター試験対策数学ＩＡ・ⅡＢ)* | | | | | 32 |
| 夏期 | | *(センター試験対策生物ＩＢ)* | | | | | 21 |
| | 代ゼミ | *○国公立大学英語SPECIAL『記述問題の解法』* | 標準・応用～ハイレベル | | | | 35 |
| | | *○数学ⅢＣ解法の戦略σ60* | 標準・応用～ハイレベル | | | | 13 |
| | | ○源氏物語特講 | 標準・応用～ハイレベル | | | | 19 |
| | | センター物理ＩＢ | | | | | 11 |
| | | センター化学ＩＢ | | | | | 11 |
| | 計 | | | | | | 177 |
| 2000 | 河合 | *(センター試験対策数学ＩＢ(ママ))* | | | | | 27 |
| (平成12) | | 頻出テーマ現代世界史 | 頻出分野攻略 | | | | 18 |
| 冬期 | | *(センター試験対策地理ＩＢ(ママ))* | | | | | 16 |
| | 代ゼミ | センター試験物理ＩＢ | | | | | 3 |
| | | センター試験化学ＩＢ | | | | | 11 |
| | | センター試験生物ＩＢ | | | | | 8 |
| | | センター試験・私大マーク世界史 | | | | | 7 |
| | | センター試験政治・経済 | | | | | 5 |
| | 計 | | | | | | 95 |

下線：講座名を加筆修正したもの
カッコ：衛星講座対応でないもの
太字：講座の照合ができないもの(理由は括弧書き)
○：オリジナル講座
*：現役生とセットと記載されているもの(人数が現役生を含んでいるかは不明)

# 学生寮史の研究 ②

## ― 近代日本における青年の共同生活―

金澤（かなざわ） 冬樹（ふゆき）（長野県立大学・職員）

### ●多様な共同生活の姿

学生寮史を考察する上において、分析の対象をどのように絞り、いかなる軸で検討していくか。関連する先行研究を整理しなければならないが、まずは見取り図のようなものを粗描してみたい。

学生寮史を考察するに際して、「学生寮」と称していない場合も検討の対象に含めたい。その理由は、本研究が学生寮そのものを考察の対象にしてはいるものの、より広い課題設定として「青年の共同生活」を考察したいと考えているためである。青年の共同生活は、どのような理念や目的で始められ、いかなる運用がなされていたのか。その共同生活による「共同体」のあり様（意識的なもの・無意識のものも含めて）はいかなるものだったのか、という観点から考察を進めたい。

今回は試みに、近代日本における青年の共同生活の種別を整理する。種別として（1）学校設置寮、（2）団体設置寮、（3）下宿における共同生活、（4）書生、（5）産業における共同生活、（6）軍隊における共同生活、（7）地域における共同生活、の7つに大別して**【表1】**に整理してみた。以下では、各種別の内容について簡単に見てみよう。

### （1）学校設置寮

「学生寮」として第一に想定されるのが、各学校が設置した寮だろう。分析対象を定めるに際しては、学校の種類ごとに検討することが考えられる。例えば高等教育機関を見た場合、全寮制を採用した第一高等学校をはじめとした旧制高等学校の寮の他、大学や専門学校等の状況も確認する必要がある。さらに官立・

**【表 1】近代日本における青年の共同生活の種別**

| 学校内／外 | 共同生活の種別 | 形態 |
|---|---|---|
| 学校内 | 学校設置寮 | 高等教育機関 |
| | | 中等教育機関 |
| | | 文部省所管外機関 |
| | | 軍学校 |
| 学校外（主として学生） | 団体設置寮 | 同郷団体 |
| | | 宗教団体 |
| | | 育英団体 |
| | 下宿 | 下宿屋 |
| | | 私塾等 |
| | 書生 | 名士宅等への寄宿 |
| 学校外（学生以外） | 産業 | 社員寮、寄宿舎学校 |
| | | 住み込み |
| | 軍隊 | 兵営 |
| | 地域 | 仲間宿、寝屋子等 |

公立・私立別の設置形態の差も確認したい。中等教育機関であれば、拙稿でも何度か取り上げたように各地の旧制中学校に寄宿舎が設けられており【注 1】、師範学校の寄宿舎も著名であろう。

学生寮を体系的に考察する上では、文部省が所管している学校以外にも視野を広げたい。例えば、軍学校は共同生活を組み込んだ全寮制学校であり無視できない。陸軍士官学校や海軍兵学校等、軍学校においては共同生活そのものが教育課程の一環に組み込まれているともいえよう。また、戦後の各省庁所管の大学校も学生寮を設置している例が多く、全寮制を採用している場合もある。文部省所管の学校とは異なり、その多くが比較的に収容率の高い寮を設けているのは、厚生面の目的にとどまらない理由があるかもしれない。

### （2）団体設置寮

「学生寮」といっても、学校が設置する寮に限らない。学校とは異なる団体が設立した寮で、学生を対象にした寮も多様である。例えば、各地の同郷団体が設置した学生寮である。これらの寮は、同郷団体により明治期以降に数多く設立され、今日でもいわゆる「県人寮」として存続している【注２】。同郷団体の他にも、宗教団体や育英団体等が設置した学生寮がある。

### （3）下宿における共同生活

下宿とは、部屋を借りて居住することと定義できるが、今日では一人暮らしが一般的である。そのため、共同生活の対比として下宿を考察することもできるが、共同生活という面においても下宿は考察できる。賄い付き下宿のように、居住者による共同生活の要素が強い下宿形態もあり、一概に捉えることはできない。また、複数の仲間で下宿して共同生活する事例もあり、今日で言う「シェアハウス」のような形態も行われていた。

また、私塾のような形態の下宿もあり、学校から公認されている下宿もあった。共同生活という点では学校設置の寮と類似しており、比較する価値があるだろう【注3】。

### （4）書生

「書生」として名士宅に寄宿する形態もある。明治以降を見れば、政財界の名士宅等に青年が共同生活し、経済的支援を受けつつ、名士の身辺を手伝うとともに、学ぶ様態が知られる。明治期以降はもとより【注４】、戦後においても事例が確認できる【注5】。

### （5）産業における共同生活

各産業における住み込みや寄宿舎も共同生活の一つの形といえる。会社や商店に設置された寄宿舎が、福利厚生としての役割のほか、教育訓練の一環とし

て運用されていた事例もあり、共同生活の一形態として考察の範囲に含めることができよう【注6】。

### （6）軍隊における共同生活

近代における共同生活として無視できないのが軍隊生活であろう。徴兵制により全国の多くの人々が兵営生活を経験しており、また、師範学校の寄宿舎に兵営式が導入されていたことも知られる。同じ軍隊でも、陸軍士官学校や海軍兵学校のような幹部養成機関の共同生活と、様々な職種や境遇から徴兵された兵営における共同生活では、その内実は異なることが想定される【注7】。近代における青年の共同生活を考察するに際して、軍隊における共同生活をどのように位置づけるかは重要な課題である。

### （7）地域における共同生活

江戸期における若者宿から続く共同生活の事例は無視できない。近代以降も「仲間宿」「寝屋子」「寝宿」等という形で、複数の青年による共同生活を行う事例が、各地にあったことが知られる【注8】。これらの共同生活では、職業教育や地域活動を始めとした多様な機能が果たされていた。

## ●種別化により何が見えてくるか

以上、近代日本における青年の共同生活の種別を粗描してみた。もちろん、この他にも多様な事例があるだろうし、今回の種別では包摂できない事例も多々考えられる。また、江戸期以前の事例や諸外国の事例についても別の機会に考察する必要がある。

最後に、近代日本における青年の共同生活の種別を考察することで、どのような視点を得られるかを簡単に述べたい。

1点目は、種別に共同生活のあり様を見ていくことによって、相互の比較が可能になってくる。比較することによって、ある共同生活の事象が独自のものである

のか、広く様々な共同生活に見られる事象なのかが見えてくるのではないだろうか。もとより、各共同生活の詳しい分析を進める必要があるが、暫定的にせよ、共同生活の全体像を座標とすることで、分析手法も整ってくると考えられる。例えば、なぜ学生寮を設けたのか、なぜ共同生活を始めたのか、経済的理由なのか教育的な理由なのか、設置種別や時期によって違いがあるかもしれない。さらに、設置者による寮への関わり方、寮生の自治組織の在り方なども多様であったことが想像される。

２点目は、「学生寮」という枠組みは、学校教育の範囲を超えるという点が見えてくる。今回、近代日本における青年の共同生活の種別を整理してみて、青年の共同生活がいかに多様な広がりを持っているかが垣間見えた。「学生寮」とは言いながら、必ずしも学校教育に包含されない空間であり、一定の独立した空間であるとも言えそうだ。

同じ共同生活でも、始まった経緯や目的が違えば、類似した生活の事象でも別の意味を持つことになる。そこに「教育」や「人間形成」の意味を付与するのか否か、という点でも違いが生じるだろう。今回は試行的に近代日本における青年の共同生活の種別を整理したが、本研究における考察範囲として想定しつつ、今後も適宜修正を行っていきたい。

**≪注≫**

【注１】旧制中学校の寄宿舎生数の状況は、拙稿「学生寮の時代㉑―学年別における寄宿舎生の割合は？」本ニューズレター 第36号2017年12月号を参照。

【注２】同郷団体の学生寮については、拙稿「学生寮の時代㉓―同郷団体の『学生寮』」本ニューズレター第58号 2019年10月号を参照。

【注３】例えば、第四高等学校における西田幾多郎主宰の三々塾が知られる。学校公認下宿であった三々塾は、学校寮である時習寮とは異なる共同生活の場として志向されており、学校設置寮と下宿における共同生活を比較する上でも興

味深い。三々塾については、藤田正勝『人間・西田幾多郎―未完の哲学』岩波書店 2020年 p53-55、井上好人「四高・『超然主義』の神話誕生―河合良成の校風改革運動と時習寮の『38名』」金沢大学資料館紀要 第7号 2012年を参照。

【注4】例えば、渋沢栄一記念財団の前身である竜門社は、明治期に渋沢栄一邸の書生部屋に寄寓していた青年らにより結成された（公益財団法人渋沢栄一記念財団HP「渋沢栄一記念財団の沿革」https://www.shibusawa.or.jp/outline/history/index.html#zu01より）。

【注5】片岡憲男『田中角栄邸書生日記』日経BP企画 2002年では、著者の早稲田大学在学中（1973～1977年）における田中角栄邸での書生生活の様子が回想されている。

【注6】例えば江口潔が、補習教育という近代的な店員養成法であるとともに、住み込みによる伝統的な店員養成法を引き継ぐものとして、商店における寄宿舎の教育を分析している（江口潔「百貨店における教育―店員訓練の近代化とその影響」『日本の教育史学』54号 2011年 p46-48。

また、産業による寄宿舎制度としては、繊維産業における寄宿舎が知られる（ジャネット・ハンター、阿部武司・谷本雅之監訳『日本の工業化と女性労働―戦前期の繊維産業』有斐閣2008年 p107-113。

【注7】兵営での生活については、例えば一ノ瀬俊也『皇軍兵士の日常生活』講談社現代新書 2021年 p58～94を参照。

【注8】「仲間宿」「寝屋子」「寝宿」等、地域における共同生活の事例については、佐藤守『近代日本青年集団史研究』御茶の水書房 1970年 p282～285、p449～450等を参照。

# 体験的文献紹介(33)

## ―進学系統の中の「中学」―

神辺（かんべ） 靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

近代の学校は国家の制度の中で生息する。いかなる法規によって中学校が認可され、国家・社会の中で活動できるのか。私のこれまでの論考にはこれが抜けていた。

「中学」が法規として最初に登場するのは明治3年2月、大学（文部省成立以前の教育行政府）が発した「大学規則」「中小学規則」である。「輦轂（れんこく）（天皇の車）ノ下、大学一所ヲ設ク、府藩県各中小学ヲ置ク」とあるように、大学を都に一ヶ所、中学と小学を府藩県に置くというのである。大学と中学と小学は三段階の学校系統のようにみえるが、国家の大学は都に一つ、それへ進学する中学と小学は一体のもので全国の府藩県につくるという。廃藩置県以前だから大名が支配する藩と新官僚支配の府と県に中学小学をつくらせるのは仕方ないが、「学制」以後のように府県に中学、府県内各地に小学という考え方と違う。学校別に標準年齢が示されているが〝小学凡ソ8～15歳〟〝中学凡ソ16～22歳〟〝大学凡ソ22～30歳〟とある。これは近世江戸時代・藩校の素読課程（少年期）、講義課程（青年期）、遊学課程（成人以後）のようで、士族を対象にしたもので庶民（全国民）を対象にしたものでない。大学の学科は教科（倫理道徳）・法科・理科・医科・文科とヨーロッパ風である。中学の学科は大学と同じで、小学の学科は句読・習字・算術・語学・地理学と大学の五科の大意となっているからこの小学は中学から大学への進学課程であった。このように唐突な規則は実行できるものではない。しかるに金沢藩をはじめ、いくつかの藩がこの規則を変形しながら実施しているのである。日本人の進学熱に異様なものを感じた。

ところで、日本が「大学規則」「中小学規則」をつくった当時、フランスを除いた西洋諸国で初等・中等・高等という3段階の学校系統を考えた国はなかった

のである。フランスは大革命の頃から全国民に開かれた学校系統を考案し、試行しはじめたが、ナポレオン治下で公布された「公教育一般法」は

小学校 école primaire

中学校 école secondaire

専門学校 école spèciale

の三段階にした。イギリスの中等教育は伝統的なGrammar School があったが産業革命以後の新しい富裕階級の進学要求に応えられず議会の教育制度改革委員会は何度もその改革に苦慮していた。アメリカは小学校の上にグラマースクールとかハイスクール、シニアスクール、アカデミー等、各種各様の中等学校が乱立していた。そうした中にあって、いち早く小学→中学→大学という単線型進学系統を考案した日本は先進的にみえる。しかしながら実は近世の儒者や西洋事情研究の洋学者が多くの学校論を展開し、その中に進学系統に関するものが多くあったのである。中国に小学から大学へ進む進学系統があることを教えたのは山鹿素行であろう。『山鹿語類』の中で中国には都に大学と小学があって貴族の子どもはみな8歳から13歳まで小学に入り、14、5歳から優れた者は大学に入ると述べている。近世後期の熊本藩の儒者・齋藤高寿は周の時代から小学→中学→大学の進学系統があったと説く。地方の党（約500家）にあるのが庠（しょう）で小学のこと、州（約2,500家）にあるのが序（じょ）で中学のこと、そして都にあるのが大学で小学→中学→大学と進学すると言う。幕末になると学校の進学系統を説く論者は多くなる。会沢正志斎、小林虎三郎、佐藤信渕等である。いまその説の紹介は省くが、小学→大学の進学に塾、庠等の学舎を当てたもので〝中学〟の存在は説いていない。近世初頭のヨーロッパの進学系統を小学・中学・大学という語句で紹介したのは意外にもイタリア人Guilio Aleni（中国名・艾儒略（がいじゅりゃく））である。彼はジェスイット派の宣教師で17世紀始め明に来て各地を遊歴した。彼の著書『職方外紀』は世界地誌である。ヨーロッパの進学系統を中国文で書いたのである。即ち7、8歳から17、8歳まで各郷村にある〝小学〟で名詞や歴史、詩文、文章を学ぶ。それから国や郡にある〝中学〟に進学してレトリックやフ

ィジックを学び、それが終ると〝大学〟に進学する。大学には医科、治科、教科、道科があって学生はこの一つを選ぶと言う。『職方外紀』は日本に伝来してから知識人に広く読まれたというから小学→中学→大学の進学系統は知識人の間では知られていた。また金沢の人・佐野鼎は『万延元年訪米日記』で「中学館あり、これ小学校を出でて未だ大学校に入べからざる中等の生徒を教る学館なり。これをセコンデレイスクールと名づく」と記している。福沢諭吉の『西洋事情』は彼が欧米で見聞した社会事情を鋭く描写したものである。かれは学校と学校制度に関心を持って詳細に論述している。そして当時の欧米の複雑な学校制度を日本旧来の大学小学観で説明した。これが慶応2（1866）年発兌の『西洋事情初篇』における学校制度紹介である。翌慶応3年、彼は幕府軍艦購入委員の随員として再度アメリカに渡った。この時、彼はアメリカの進学制度についてくわしい認識を持った。帰国後、発兌した『西洋事情二編』（慶応3年冬）におけるアメリカの進学制度の説明はわかり易くなっている。総括して彼は「学校に大中小の順序あらば」と述べ、「中学」という概念を入れることで進学系統がわかることを示した。

明治2年、政府直轄の開成学校から内田正雄訳の『和蘭（おらんだ）学制』が出版された。この書は1857年8月に公布されたオランダの法規の一部を訳出したものである。第1部小学条例、第2部中学条例からなっている。ここで言う〝中学〟は一種類の学校を言うのではなく下記5種類の総称である。

1. 平人学校……2年制で昼間と夜間がある。
2. 上等平人学校……3年制と5年制がある。
3. 農学校
4. 女子中学校
5. 諸術学校……工芸学校、建築、造船、器械、鉱山等の分科がある。工業専門学校に当る。

平人学校は国民一般の学校で職人や農民のためのものである。

要するにここにあげられた中学は大学進学のためのものではない。ヨーロッパ19世紀末の産業革命進行にともなう市民の実学的中等学校を記しているのである。『和蘭学制』の中学は明治3年の「大学規則」「中小学規則」には反映されていない。次の「学制」の中学の条項に影響を与えたと思う。

以上、明治3年の「中小学規則」の中の〝中学〟の由来を略述した。この考証は「わが国における中学校観の形成」として「東京文化短期大学紀要第2号」（1977年）に掲載した。一般に小学→中学→大学の進学系統は明治3年の「大学規則」「中小学規則」にはじまるように認識されているが、実は近世初頭から日本の儒者や洋学者の翻訳、また外国の宣教師等によって少しずつ伝えられていたのである。新政府が公布した法令法規を唯一の一次史料と思わず、その字句の意味を探究することが史実に迫る上で大切なことと思う。

参考文献

「大学規則」「中小学規則」（内閣官報局『法令全書第3巻』）
阿部重孝『欧米学校教育発達史』
『世界教育史大系9・フランス教育史1』
『世界教育史大系24・中等教育史1』
宮地誠也『アメリカ中等教育史』
『世界教育史大系17・アメリカ教育史1』
中泉哲泉『日本近世学校論の研究』
国書刊行会『山鹿語類』
佐藤信渕『垂統秘録』（滝本誠一編『日本経済大典18』）
齋藤高寿『学校図説』（筑波大学中央図書館所蔵）
小林虎三郎『興学私儀』（尾形裕康『学制成立史の研究・資料編』所収）、「艾儒略・職方外記」（守山閣叢書本・宮内庁書陵部蔵）
中野善達「幕末期の欧米教育事情に関する知識―地理書を中心として」（教育史学界紀要9日本の教育史学・1967年）

髙祖敏明「艾儒略 Guilio Aleni著・西学凡の教育史的研究」（教育史学会17・日本の教育史学1974年）
佐野鼎『万延元年訪米日記』（金沢文化協会、金沢市立図書館蔵）
『西洋事情初編』『同二編』（『福沢諭吉全集1』）
『和蘭学制』（吉野作造編『明治文化全集10』）

『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項（2015年6月15日現在）

1.（目的）広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。

2.（記事のテーマ）記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。

3.（刊行頻度・期間）研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。

4.（編集委員会・編集世話人）発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は冨岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。

5.（執筆者）執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。

6.（記事の責任）記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせることがあります。

7.（記事の種類・分量）記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。

8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少部数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。

9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。

11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

## 短評・文献紹介

このたび、大多和直樹さん（生1970年～、現在：お茶の水女子大学、教育社会学）が記された「学校から職業へのつながり　工場・オフィスモデルとコンビニモデル」（『放課後の社会学』2014年、第9章として所収）を、興味深く拝読しました。2000年代以降の現代社会では、コンビニなどで働くフリーターが社会で象徴的に多く出現してきている、このような働き方を大多和さんはコンビニモデルと称しています。それまでは、終身雇用で雇われ、工場やオフィスなどでサラリーマンとして働き、年齢に応じて昇進・昇級するといった工場・オフィスモデルが主流であったといいます。対してコンビニモデルでは、働くシフト・時間帯なども自身の都合で選択が柔軟可能であり、労働時間をこえて必要に干渉されることもない自由な反面、その代償として十分な福利厚生や生活保障などは付与されないという現実があります。大多和さんによれば、現代の新自由主義（ネオリベラリズム）の考え方から、規制緩和や市場原理にしたがい、個人の選択的な自由を尊重した結果として、このような社会的な現実が好む好まざるにかかわらず、構造的に生まれているのだとします。その結果として、とくに学校側とコンビニモデル職業とのつながりが、きわめて「不健康」で大いに問題であろう・・と指摘されています。「進路指導の過程において、フリーターになるということは、ある意味「よくない」進路であり、ときに「フリーターとはなってはいけないもの」もっといえば「だめな人」というスティグマの付与（スティグマタイズ）に学校が荷担してしまうこともしばしばある」とし、「いまは「学校は、手を尽くしましたが、彼／彼女らは指導に乗って来ませんでした。その結果、フリーターになりました」というようなフリーター輩出の論理となっていることが少なくない」のではないかと、現代の学校教育のありようについて反省的に問題提起されています。

そこで、私・谷本も次のように考えました。たとえ工場・オフィスモデルであっても、いまや終身雇用制は総じて崩壊しつつあり、成果主義による評価査定の導入が顕著にみられますよね。また雇用形態上で常勤職の扱いであったとしても、過酷な勤務実態を強いるようなブラック職場の存在は実に悩ましいものでしょう。数多くある労働・働き方には、もちろんメリットとデメリットが少なからず存在するわけですが、いくらある時点で自身が選択した結果であったとしても、その時点で判断した選択を、また種々の状況やライフステージの変化にともない必要に応じて随時選択し直す、ある程度の自由と寛容さが、やはりこれから多様な生き方を可能とするわれわれの社会ではもとめられているのではないか・・と実感します。（谷本）

蝶慎一「1960年代前半における学寮の議論とその役割に関する考察 ―学徒厚生審議会の審議過程とその答申に着目して―」（『大学史研究』第30号、大学史研究会、2021年12月）を読んだ。蝶氏は、近年、大学教育における学寮の重要性が増していること、学寮が経済的な居住環境の提供としてだけでなく、学生同士の共同生活を通しての教育寮としての機能も重視し始めていることを指摘した上で、学寮について本格的な検討を経て1962年に出された学徒厚生審議会答申「大学における学寮の管理運営の改善とその整備目標について」を、早稲田大学大学史資料センター所蔵の「瀧口宏旧蔵資料」などを使って実証的に検討している。戦後の学生寮についての実証的な歴史研究が開始されたことに、共通の関心を持つ者の一人として、心から敬意を表したい。蝶氏の学生寮研究についてもう少し読み込んだ上で、本ニューズレターでもう少し詳しく紹介したい。（冨岡）

## 会員消息

東京新聞で連載されていた、江口寿史「私の東京物語」12 お茶の水 楽器は色気（2021年12月10日）を偶然にも読みました。漫画家・イラストレーターである江口寿史さん（生1956年～）は、楽器店も多い東京・お茶の水をよく訪れるそうで、あまり上手には弾けない・・といいながら楽器、ギターやエレキギターを何本も持っているとのこと。江口さんによれば、「楽器を描くのが好きだから。楽器ってすごく官能的だと思います。フォルムもそうだし、木の表面が経年変化で渋くなっていくところも、塗装が剥げて下の木目がのぞいていたり、打痕でさえも好きで。そういう様子を絵で描くのも大好き」だそうで、「僕が「色気」というフィルターを通して、楽器を見ているからだと思います。僕にとって楽器を描くことは女性を描くことと同じなんです」といいます。そして、そんな江口流の創作活動の「原点は色気です。楽器にしても人物にしても、目に見えない色気を絵からも醸し出したくて、描き続けているのかもしれません」と強調していました。創作者としての拘りとは、ほんとなにが原動力になるのか？・・、傍目にはうかがい知れませんね。でも予想外なそこがまた、なんとも興味深いと感じるのでしょう。（谷本）

新年あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願い致します。
2022年を迎えるにあたって、新連載「子どもたちと考える校則」をはじめます。「校則」をテーマに、子どもたちと長期的に考えていこうと思います。原稿の末尾にQRコードを添付しておりますので、是非ご意見・ご感想をいただけますと幸いです。（ハ田）

本年もよろしくお願いいたします。2022年度のシラバスの作成をしました。予定では4月から全面的に対面が原則です。ちなみに、1月から始まった、ある学校の集中講義は、学生のコロナ感染により急遽オンラインに変更しました。4月からの講義はどうなるのか、わかりません。（山本剛）

2020年の暮れは修士論文執筆もあり自室の大掃除をおざなりにしたまま1年が過ぎてしまいました。年末は意を決して自室の大掃除にとりかかり、ゴミ袋をいくつもいっぱいにしながらなんとか終えることができました。大掃除をする中で山の下の方から出てくる資料やら何やらに懐かしくつい目を通してしまい、思ったより時間がたってしまうのが恒例になっています。計画的にやる癖をつけないと将来が危ぶまれる、などと一人危惧する年末年始でした。（猪股）

長野ではこの時期、毎週のように雪が降ります。山沿いのため、天気も変わりやすく、出勤した時は晴れていたのに、退勤の頃には一面の銀世界というような時もあります。冬の時期、一苦労なのが雪かき。移住してから雪かきをすることが増えました。職場でも、雪が盛んに降り続くと、職員に雪かきの招集がかかります。そんな時は勢い込んで銀世界に飛び込むのですが、始めると結構夢中になってしまいます。大勢で行う雪かきは賑やかで、会話も弾みます。周りの手慣れた雪かきの手付きを見習うこの頃です。（金澤）

仕事その他で突発事態が重なり、今回は連載記事が間に合いそうもありません……。やはり、そうした時に備えて少なくとも1回分は原稿を書きためておきたい、と心に誓います。そして、 東京大学東アジア藝文書院の高原さんより、一高プロジェクト映画『籠城』の告知をいただきましたので、次頁にご紹介します。松本市の旧制高等学校記念館の夏期教育セミナーで発表していただいた皆さんが関わっています。そのなかの一人、高原さんは原作・脚本を担当しています。すごいですね。大変楽しみです。（冨岡）

（東京大学東アジア藝文書院のサイトより　一高プロジェクト映画『籠城』の告知）
https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/projects/first-high-school-materials-archive/rojo-trailer/

――自信のないものに人間は形式を与えるものだ。自分自身、家族、国家……人間の生とかかわることばかりなのに、なんて、見失いやすいのだろう……。私は、どのように人生にかたちを与えればいいのか知るために、研究をしているのかもしれない。
――歴史にとらわれず、規範にとらわれずに生きるのが、自由だというのだろうか。ほんとうに自分自身を生きていると言えないまま……こんなことばかりが私の頭を巡っている、ずっと……私の中で……。

映画『籠城』予告編① <https://youtu.be/Y3K6qbdeei0>

旧制第一高等学校（通称、一高）は、1935年に本郷から駒場へと移転するが、そこでの生活は、本郷時代以来の「籠城主義」と呼ばれる自治寮での共同生活に支えられた、独特かつ閉鎖的なものだった。だが、1941年、1942年と戦時色が深まるにつれ、一高のアイデンティティともいえる「籠城主義」は、そのまま維持することはできなくなってくる。

本作は、あたかも一高生らに同一化するかのように、アイデンティティの拠りどころを求めて研究に専念する大学院生の主人公「わたし」の意識を通じて、駒場時代の一高を描き出す。

出演
声：金城恒、高原智史、永澤康太、新田愛、宮城嶋遥加、安原由佳、朱彬
男子学生：乙幡亮

スタッフ
監督：小手川将
プロデューサー：髙山花子
脚本：小手川将、高原智史

撮影：一之瀬ちひろ

音楽：久保田翠

サウンドデザイン：森永泰弘

音響協力：福田貴成

録音エンジニア：中村益久

編集：小手川将

記録：日隈脩一郎

企画：石井剛

原案：高原智史「独白録」

制作協力：田村隆、星野太、二瓶剛（SETENV）

資料協力：東京大学駒場博物館、折茂克哉、坪井久美子、東京大学駒場図書館、国立国会図書館

特別協力：宇野瑞木、宋舒揚、横山雄大、立石はな、林義春、陳希、宮﨑泰樹、東京大学情報学環メディアスタジオ、山内隆治、柳志旼、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部

制作：東京大学東アジア藝文書院（EAA）

2022年／65分／日本／カラー

2022年3月下旬に駒場キャンパスにて上映会を予定しております。詳細が決まり次第、こちらのページで告知いたします。

本ニューズレターのPDFファイルをダウンロードして、Adobe Reader 等のソフトの「小冊子印刷」機能を利用して「A4 サイズ両面刷り」に設定して印刷すれば、A5 サイズの小冊子ができます。